

魔法少女の裏表

太陽系第三惑星年地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章 魔法少女マジカルロータス

森下蓮もりした れんは何の変哲も無い、普通の女子中学生だった。

そんな彼女がある日、森に囲まれた神社にお参りに行き、そのついでに併設されている庭園を歩いていた時のこと。

風景写真を取るのが好きな蓮は、使い捨てカメラ片手に庭園の奥へと進んでいく。

ふと気がついた。自分が庭園の道から外れ、ざわつく木々に囲まれていることに。

来た道に戻ろうにも、道が無い。

立ち入り禁止区域に入った記憶は無いのに。そう思いながら血の気が引いていくのを感じていると、ちらちらと光が目に入った。

何かと思い光の方を向くと、その先にはまるで鏡の様に光を照り返している葉を付けた大木が立っている。

そしてその大木の前には、優美なドレスを着た女性が一人。

彼女は言う。

「突然お招きしてしまって、ごめんなさいね。」

あなたにお願いがあつてここまで来て貰ったの」

その言葉に、蓮は身を硬めながら訊ねる。

「お願いって、何ですか？」

あなたは何者なんですか？」

「私は『鏡の樹の魔女』と呼ばれているわ」

「魔女……？」

鏡の樹の魔女曰く、蓮にはこの世に蔓延^{はびこ}る悪を少しでも退治して貰う為に、魔法少女になつて欲しいと言う。

勿論、そんな話をいきなりされた蓮は戸惑うしか無い。

魔法少女などと言う物は実在しない。と言いたい所だが、実際今までニュースを見ていて何度か魔法少女が悪者を捕らえたという話は聞いている。

なので、魔法少女という物が実在するのは知っては居たが、まさか自分がそれになるとはつゆにも思っていなかったのだ。

「なんで、私が魔法少女に？」

蓮の問いに、鏡の樹の魔女は優しく答える。

「今、他の地域には魔法少女が居るのだけれど、この地域には暫^{しばら}く居

なかったの。

このままではこの地域が手薄になると思って適正のある子を探したら、あなただったのよ」

適正と言われても、蓮には自分の何処に適正があるのかがわからない。

なので、一体何を持ってして適正というのかを鏡の樹の魔女に訊ねたが、それは秘密だと言うことで教えて貰えなかった。

胡散臭いと思いながらも暫く鏡の樹の魔女の話を聞いていた蓮。結局鏡の樹の魔女の言う魔法少女の仕事を受け持つことになってしまった。

「わかりました。魔法少女になります。

それで、やっぱり変身とかするんですか？」

不安そうにそう訊ねる蓮に、鏡の樹の魔女は一本のネックレスを取り出して渡す。

「このネックレスをいつも着けていてね。

このネックレスに付いているモチーフに念を送ると変身出来るから」
そう言って、蓮がネックレスを付けるのを確認した鏡の樹の魔女は続

けてこう言う。

「それじゃあ、変身した時のコスチュームを考えましょうか」

まさかコスチュームの案まで聞かれるとは思わなかったなあ。と、鏡の樹の魔女から解放された蓮は、何とか戻ってこられた庭園の道を歩きながら先程のことを反芻^{はんそう}していた。

暖かな春の日とは言え、まだ日はそんなに長くない。

少しずつ傾いていく太陽と庭園の木々を写真に撮り、蓮は庭園を後にした。

家の近所の写真屋さんに使い捨てカメラを現像に出し、部屋の中で改めてネックレスを眺める。

何という金属なのかはわからないが、少し赤みがかった金色の、蓮の花を模ったチャーム。

『折角あなたはお花の名前なのだから、名前と同じお花のモチーフにしてみたのよね』と鏡の樹の魔女は言っていたが、あらかじめ名前を把握^{はく}していたと言う事は、自分に狙いを絞って離さないつもりだったのだ

ろうなと改めて思う蓮。

ふと、蓮が周囲を見渡し始める。

「……本当に変身出来るのかな……」

恐る恐る蓮の花のチャームを握り、ぽつりと変身する為の言葉を口にする。

「へ、変身、マジカルロータス……」

すると途端に蓮の体は光に包まれ、ほんの数秒で姿が変わった。

足下にはトゥシューズ。体には純白のチュチュ。柔らかなボブカットの頭には蓮の花があしらわれ、顔にはマスクラが装着されている。

「どうしよう、本当に変身しちゃった」

部屋に置かれた姿見の前でオロオロしていると、誰かが部屋のドアを叩く。

「お姉ちゃん、晩ご飯出来たって」

「わかった、ちよっと待っててね」

妹の睡が部屋に入ってこない様にドアを押さえつけながら答え、蓮はそっと変身を解いたのだった。

それ以来、蓮は慣れないながらも魔法少女として少しずつ活動をす
る様になった。

鏡の樹の魔女曰く、学業優先と言う事で、基本的に魔法少女の活動は
学校が終わった後、若しくは始まる前の早朝だ。

今日も早朝の牛井屋で強盗犯を締め上げている所だ。

店員が警察に通報し、警察が来るまでの間、蓮が武器として使ってい
る新体操用のリボンで犯人を縛り付けておいている。

そして警察がやってきて。

「ご協力有り難うございます。

所で、あなたは……」

「新任の魔法少女、マジカルロータスです」

「魔法少女ですか！

これはこれは助かりました。

これからお世話になる事が有るかもしれませんが、その時はよろし
くお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

犯人が引っ立てられている間に警察官と挨拶を交わし、蓮はそそく

さと牛井屋から出ていった。

牛井屋で犯人を縛り上げたのが朝食前だったので、蓮は一旦家へと戻り、朝食を食べる。

今日の朝食はすいとん。

どんぶりに入った小麦粉の団子^{だんご}と、ささがきにしたゴボウ、柔らかな人参に出汁取りも兼ねていられているウィンナーを噛みしめる。

春とは言えまだ朝は冷えるので、この暖かい朝食は蓮にとっては有りがたかった。

しかし、いつまでものんびりしている訳には行かない。学校に行かなくては。

蓮はどんぶりに入った汁を飲み干し、制服に着替える準備をしに部屋へと向かった。

そしてやってきた中^が学校。

皆まだ入学したてにも拘^がわらず、早速それぞれに友人を見付けている様だ。

勿論、蓮にも友人は居る。

「蓮、今朝のニュース見た？」

「今日のニュースって言っても私と琉菜じゃ朝見てる番組違うから、どのニュースかわからないよ？」

蓮の友人、桑原琉菜くわはら るな曰く、今朝のニュースで魔法少女が強盗犯を捕まえたと言う物が有ったとのこと。

とても身に覚えはあるが、自分が締め上げてきたとは一言も言えずに琉菜の話を聞く。

「魔法少女って、小さい頃懂れたな」

「琉菜は魔法少女になりたいの？」

「なりたいて思ったこともあるけど、あたしじゃ皆を守る様な魔法少女になんてなれないなって」

「そうなの？」

それを言ったら蓮も、『皆を守る魔法少女』として上手くやっていける自信がまだ無いのだが、それは言わない。

ふと、蓮は思った。

自分よりも琉菜の方が魔法少女に向いているのでは無いかと。

中学に入ってから体育でやっている武術の授業でも、琉菜は筋が良いと先生に褒められているし、体力もある。それに何より、曲がったことが大嫌いで正義感が強いのだ。

特に志も無くふんわりと魔法少女をやっている自分よりも、琉菜の方が……そう思い、蓮は制服のブラウスの下に付けているネックレスに手を当てた。

その日の放課後、蓮と琉菜はどの部活に入るかを決めることになった。

それは今年入学した全校生徒がそうなのだが、蓮はどの部活に入るか悩む。

この学校は、基本的に帰宅部という物は認められていないのだ。

だから、魔法少女としての活動と両立させる為には、時間が短いか、融通することの出来る部活に入らなくてはならない。

運動部は練習時間が長いから入るのは無理だし、そもそも運動部に興味が無い。

結局、蓮は文化部を幾つか巡った後、美術部に入ることに決めた。

琉菜はテニス部に入ることにした様で、美術部に入る蓮にこう声を掛ける。

「部活が別々で帰る時間が合わないのは残念だけど、部活も楽しもうね」

「う、うん」

無邪気にそう言う琉菜に、蓮は魔法少女である事の窮屈^{きゆうくつ}さを少し感じた。

第二章 追っかけオブ魔法少女

「マジカルロータスちゃんに会いたいよお……」

最近東京に現れた魔法少女、マジカルロータスが映されているニュースの映像をテレビに流しながら呻いている少年。彼は東京から電車で一時間程離れた場所に住んでいる。

地元にも魔法少女が居るには居るのだが、何となくもやい感じがしてそこまで興味は湧かなかつた。

しかしどうだろう。東京に颯爽と現れたマジカルロータスという魔法少女は優雅で、可憐で、ミステリアス。

テレビ画面を舐める様に見つめる彼、篠崎円は、完全にマジカルロータスに心を奪われていた。

円は所謂オタクなのだが、中学生にして節度をわきまえ、周囲に気を配りつつ趣味のことを楽しめる、いわばオタクエリートと言えるものだった。

そんな訳で、円は友人の柏原ユカリにはオタクである事を隠していな

い。

朝学校に登校し、早速ユカリの方から円に話しかけてきた。

「よう、おはよう。」

篠崎、今朝のニュース見た？」

今朝のニュースという言葉に円は食いつく。

「勿論見たよ。」

マジカルロータスちゃんなんであんな可愛いんだろうな。マジ天使」

「可愛いって言っても顔はお面で隠れてんじゃん？」

「マジカルロータスちゃんは、確かに顔はわからないけど絶対可愛いって。」

もうほんと可愛い。

他のニュースもついでに見過ぎて社会の成績が良くなるくらいには可愛い」

「篠崎って意外と真面目だよな」

そんな話をしている間にもホームルームが始まる。

円とユカリは大人しく席に着いた。

放課後、円は自分が所属する写真部の部室で静物せいぶつを撮る練習をしていた。

本来なら写真部員として一眼レフカメラくらいは持っていた方が良いでしょうが、顧問がそこまで厳しいことを言わない質であるのと家の財政状況を考えて、円が使っているカメラはコンパクトカメラだ。コンパクトカメラと言っても、色々と設定をいじめることは出来る。

円はいつか一眼レフカメラを手に入れて、憧れのマジカルロータスを写真に納めようと夢見ていた。

ふと、顧問の声が部員全員に掛かる。

なんでも、陸上部の部員が写真のモデルになってくれるので、人物の写真を撮る練習をしようとの事だった。

円は、陸上部ならユカリが居たはず。と、早くもユカリにモデルを頼もうと思った。

そしてやってきたグラウンド。

他の男子部員は各々適当な陸上部員に声を掛けて写真を撮っているのだが、円はなかなかユカリにモデルを頼めないで居た。

何故なら、女子の写真部員がユカリへ次々に声を掛けているからだ。
……確かに黙ってりゃあいつイケメンだし。

と、少し不服を抱えながら、結局円は他の陸上部員の写真を撮らせ
て貰った。

そんなこんなで一年が過ぎ、円のカメラの腕も上がった。

相変わらずコンパクトカメラを使っでは居るのだが、それでも顧問曰
く、味の有る写真が撮れる様になった。

円は顧問の言葉に自信を付けると同時に、もどかしさも感じて居
た。

いつになったら、憧れのマジカルロータスの写真をこの手で撮ること
が出来るのか。

前にも増して活躍を増やしているマジカルロータスのニュースを見る度
に、想いは募っていく。

ある日、円はユカリにこんな相談をした。

「なあ、マジカルロータスちゃんの写真、どうやったら撮れるかな……」
「まず東京に行く所から始めないと駄目なんじゃね？」

「東京かあ……」

最近イベントとかで行くことあるけど、なかなかマジカルロータスちゃんに会えないよ……」

「漠然と東京って言っても結構広いからな？」

そう言えば、今度の日曜日コスプレのイベントがあるって言ってたけど、東京行くのか？」

「マジカルロータスちゃんに会える希望を抱きつつ行くお……」

円は昔からコスプレに興味があった様なのだが、周りからイベントに行くのはせめて立志式を迎えてからにしろと言われていたらしく、イベントに行く様になったのは割と最近だ。

何はともあれ、写真部で写真の腕を磨き、最近出回り始めたデジタルカメラの操作も覚え、円はイベントの日を待った。

そして迎えたイベント当日。

円は電車で揺られながら期待に胸を膨らませていた。

単純にコスプレイヤーの写真を撮るのが楽しみというのもあるのだが、もしかしたら、今度こそ、マジカルロータスに会えるのでは無いか

と言う希望を持っているのだ。

ユカリからは、マジカルロータスに会うことが有ったら、それは事件に巻き込まれた時だからな？　とは言われているのだが、事件に巻き込まれてでも会いたい。

「はあ……」

期待の籠もった溜息をつき、円は電車の中で新聞のスクラップ記事を広げるのだった。

電車に揺られること約一時間。イベント会場に着いた円は、早速入場料を払って入場し、撮影許可証を受け取る。

最近流行のアニメやゲームのコスプレをしている人が多い訳なのだが、偶に何のコスプレをしているのかわからない人も居る。

誰の写真を撮らせて貰おうか。そう思いながら周りを見渡していると、目に留まる人物が居た。

足下はトゥシューズ風のパンプス、純白のチュチュに、髪の色は違えども柔らかなボブカットの頭には蓮の花があしらわれ、顔にはマスク。同じような作りで色違いの衣装を着た人と写真を取り合っているそ

の二人組に、円は思わず駆け寄って声を掛けた。

「あっ、あのっ」

円の声に振り向いた二人組は、何ですか？ と返事を返してくる。脚が震えているのを感じながら、円は二人に訊ねる。

「もしかして、マジカルロータスのコスプレですか？」

すると、写真を撮られていた色違いの衣装を着た女性が答える。

「そうなんですよ。二人で色違いをやりたいねって言って、衣装作っただけです」

その言葉に、円は気持ちが高ぶるのを抑えきれず、噛みながらも写真を撮らせて欲しいと頼んだ。

二人は快くそれを承諾し、ポーズをとる。

二人一緒に写真と、それから一人ずつの写真。両方をデジカメに収めた円。

コスプレといえども憧れのマジカルロータスを目の前にした円は、本人では無い、違うのはわかってはいるけれどもどうしてもお願いしたいと思っていたことを白い衣装を着ている方に頼む。

「すいません、あの、お面外してる所を撮らせて貰っても良いですか？」

「お面ですか？　良いですよ」

微笑んだ口元を見せた後、そっとマスクを外したその顔に、円は思わず見入る。

ふつくらとした唇から想像出来る様な、綺麗な顔が円に微笑みかけていた。

コスプレでこれだけ美人なのなら、きっと本物のマジカルロータスも美人、若しくは可愛いのだろう。そう思いながらシャッターを切る。

夢の様な時間だった。

写真を撮り終わった後も少し二人と話し、二人から名刺をもらった円。

名刺を見るとそこにはコスプレをする時に使う偽名、コスプレネームが書かれている。

マジカルロータスのコスプレをしている方から渡された名刺には『ゆきやなぎ』と、色違いのコスプレをしている方から渡された名刺には『冬桜』と書かれている。

円は改めて、ゆきやなぎと冬桜に礼を言う。

それに対し、ゆきやなぎはこう返す。

「こちらこそ僕達の写真を撮って下さって有り難うございます。

頑張って衣装を作った甲斐がありました」

その言葉に引っかかる物が有った。

ゆきやなぎは自分のことを『僕』と言っている。

オタクにありがちな僕っ子なのかと思ひ訊ねると、ゆきやなぎはきよ
とんとした顔で答えた。

「あ、僕男なんですよ」

「えっ……そうなん……全然見えない……」

こんな美人が男と聞かされて、円は動揺を隠せなかったのだった。